

# 図書室月報

2021年(令和3年)5月5日

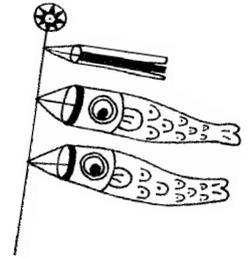
第696号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



## 『日曜俳句入門』に参加して

大野 孝儀



講師の吉竹純氏は広告代理店のコピーライターだった50歳のころ(約20年前)新聞俳壇に投稿を始められたそうです。コピーライターとは、商品に世にアピールする言葉を作り出していく仕事なので、どこか俳句作りと似た面があるのかもしれない。しかし、キャッチコピーを考えることと趣味として俳句を作るのでは根本的な違いがあると思います。趣味とはあくまでも面白さの発見、楽しさの追求なので、すから、「日曜俳句」とは吉竹氏の作った造語で、俳句を詠み新聞やメディアに投句する楽しさを指すのだそうです。

吉村氏が投句を始めたころ、選者の先生(新聞紙上の)に添削され、その作品が新聞俳壇デビューを果たしたのでした。添削が必要な作品は紙面に載らないのではないかと、という先入観が私にはありませんでした。やや驚きました。また、氏の執筆された本によりまずと、歌人河野裕子さんから電話がかかってきたこともあり、そのとき吉竹氏は随分驚かれたそうです。第一線の歌人から直接電話が来れば、さすがに仰天してしまいます。河野さんは吉竹氏の投稿作品について「とてもいい、でも少しだけ手を入れます」と言われたそうで、その掲載歌は二席に入り「評

が添えられていました。河野さんに「叱咤激励されているようで」と吉竹氏は記しています。そして2002年には毎日歌壇賞の荣誉に輝いたのでした。いつの間にか俳句から短歌に話は移ってしまいましたが、氏は俳句と短歌の両刀使いだったので、この二つは似ているようで別物であると知人が述べていたのを思い出します。私自身、俳句は作りませんが短歌は一年ほど前から習い始めました。

講座が終了して書籍を購入しようと思、氏と話した時「俳句の本は今持っていないがこれなら」と差し出された本が『日曜歌集たび』でした。表紙を開けると

生涯を雨にぬれずに終るのか  
家猫「たび」は窓を離れず

日経歌壇 穂村弘 選

が目に入りました。穂村弘は短歌界を代表するひとりであります。ここではじめて吉竹氏は短歌も詠む方なのだを知ったと思います。実はこの約2週間前、NHKラジオ深夜便を聞いていたら拙者の投稿した短歌が穂村さんに取り上げられ評されるということがありました。突然のことだったのでうれしかったというより動揺しました。この話を吉竹氏に伝え、偶然にも穂村さん繋がりであったことを、ひとり喜んで

のでした。

今回のお話で、私は特に以下の点に感銘しました。

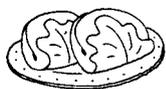
①選者の傾向を知る  
漠然と投稿するよりもこの作品は○  
○さんに見てもらいたい。そのためには気に入った選者の句集、エッセイからその人柄、傾向を知る。

②きれいであること  
ハガキを使用する際きかない字はま  
ず落ちる。(吉竹氏はパソコンを使  
用します。)

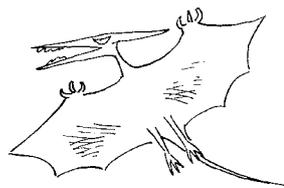
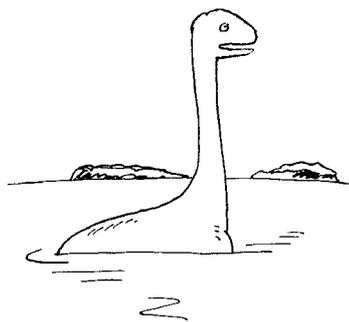
そのことにより客観的に作品  
を見ることができる。また、読んだ  
時のリズム感や滑らかさ、音として  
の美しさが必要。

それにしても各新聞に投稿され、入  
選した俳句は480句に及びます。ま  
た短歌入選作をまとめた形でこの度2  
冊目を上梓され、氏の活躍は止まると  
ころを知りません。また是非、次の企  
画をしていただき「短歌」や「キャッ  
チコピー」についてもいろいろ伺え  
たら幸いです。

鳥人のやうに俳壇歌壇飛ぶ  
吉竹純は超人であった



〈図書室のつどい 参加者の感想〉



# 『面白くて 眠れなくなる恐竜』

佐藤 あや

うーっとなつつかしい……  
赤い三角屋根の駅舎が現役の頃、8年  
間ここを利用しました。

「恐竜が来る」という友人のメールに  
誘われ、やってきました国立市公民館。  
緊急事態宣言下の1月10日・日曜、空も  
心も快晴です。カメ化石研究の第一人者  
平山廉先生のご講演とあり、みつともな  
いくらいのハイテンションで駆けつけま  
した。お絵かき娘だった筆者が「そーだっ  
たのか!」と拳を握った事柄を、かいっ  
まんでご紹介します。

・恐竜つて意外とちっちゃい  
全身骨格の板状化石・エオシノプテリ  
クスをお持ちいただきました。プテリク  
スは翼を意味します。目を近づけてみる  
と確かに羽毛があり、脚は長いけどハト  
くらい。思わず、こんなに小さいの?と  
尋ねてしまいました。TVや博物館でみる  
恐竜はどれもデカく、のし歩き、鋸歯を  
むき出しガオオオツと迫る。先生による  
と初期恐竜の多くは小柄で、一億数千万  
年の間に世界中に拡散し巨大化するもの  
が現れたのだという。さらに近年、羽毛  
や風切羽をもつ恐竜が次々と発見され、  
飛ばない鳥が恐竜であるとおっしゃる。  
アイコン的な始祖鳥はもはや始祖と名乗

れなくなっているものの、規約があった  
り地政学的力学も働いて、命名も一筋縄  
ではないことを知りました。

・ニワトリの卵とどう違うの?  
恐竜も卵を産みます。鶏卵は大好きで  
すが恐竜の卵はどうなのでしょう。実物  
化石を触ってみると、表面はザラザラ、  
厚みも違う。鶏卵は三層構造の硬い殻で  
できていますが、恐竜の卵殻は膜状や硬  
質とさまざま。形も肉食系は楕円で薄く、  
草食系は球形で分厚いものが多いそう  
です。爬虫類は卵を自ら温めませんが、恐  
竜の一部はオスが抱卵していたと考えら  
れおり、イクメン先駆者でもあります。  
ちなみに、恐竜たちの羽は飛行用ではな  
く、もふもふ系の保温用。色も判明しま  
した。一方、孵化後の幼体はみな自立自  
助型ですつて。Wow!

・GoGo久慈  
化石発掘といえば誰しも、ハンマーで  
岩石をコツコツする姿をイメージします。  
先生が調査研究中の岩手県久慈市の現場  
は、違います。スコップと長靴が大活躍。  
詳しくは『面白くて眠れなくなる恐竜』で  
どうぞ。久慈の「ボンベツド(化石含有  
層)」からは既にティラノサウルス類の歯

も出ており、未知の肉食恐竜が期待され  
ます。現在までのところ、世界でおよそ  
1200種の恐竜化石が見つかっており、  
新種もぞくぞく発見されているとのこと。  
少なく見積もっても、あと5000種く  
らいは埋もれている可能性が高いという。  
新たな発見は新たな世界を描き出します。

・誰も知らない世界  
人類が恐竜の存在に気づき始めたのは  
一九世紀初頭です。二億年も前の恐竜ワ  
ールド。その世界を見た者はいません。ひ  
と頃、「社会の先生見てきたような嘘をつ  
き」という自虐ネタが流行ったことがあ  
りました。平山先生はフィールドワーク  
から実証をつかみ、リアル映像と共にスッ  
と恐竜界へタイムトリップさせます。恐  
竜と爬虫類はどこが違うのか、小型  
恐竜と大型種では骨組織にどんな違いが  
あるのか等々、太古どっぶりの二時間で  
した。

見て、触って、五感で学べる対面講座。  
開講関係者のご努力を有難く思うと同時  
に、こんなに楽しい講座が身近にあるな  
んて、国立の文化度は高い。駅前に本屋  
さんも文具屋さんもあるし、引越して  
こようかな……。

新着図書から

<p>〈歴史〉</p> <p>アイルランド 伊藤龍也(論創社) 293</p> <p>〈社会科学〉</p> <p>ポストコロナ期を生きるきみたちへ 内田樹編(晶文社) 304</p> <p>第二次大戦下リトアニアの難民と杉原千敏 シモナス・ストレルツォーバス(明石書店) 316</p> <p>ブラック・ライブズ・スタディーズ 山本伸編著(三月社) 316</p> <p>文明の交差点の地政学 アフメト・ダウトオウル(書肆心水) 319</p> <p>パンデミックの江戸幕府 鈴木浩三(日経BP日本経済新聞出版本部) 332</p> <p>株式会社の世界史 平川克美(東洋経済新報社) 335</p> <p>渋沢栄一「論語と算盤」の思想入門 守屋淳(NHK出版) 335</p> <p>ドキュメント日銀漂流 西野智彦(岩波書店) 338</p> <p>社会問題とは何か ジョエル・ベスト(筑摩書房) 360</p> <p>メディアと感情の政治学 カリン・ウォールヨルゲンセン(勁草書房) 361</p> <p>ニッポン、クライシス! 北野秋男編著(学事出版) 361</p> <p>バナナ・ビーチ・軍事基地 シンシア・エンロー(人文書院) 367</p> <p>女子少年院の少女たち 中村すえこ(さくら舎) 368</p> <p>記憶で書き直す歴史 韓国挺身隊問題対策協議会・2000年 女性国際戦犯法廷証言チーム編(岩波書店) 369</p> <p>ストレス時代の子どもの学び 副島賢和(風鳴舎) 378</p> <p>縁食論 藤原辰史(ミシマ社) 383</p> <p>〈自然科学〉</p> <p>楽しい雪の結晶観察図鑑 武田康男(緑書房) 451</p> <p>電柱鳥類学 三上修(岩波書店) 488</p> <p>新型コロナとワクチン知らない不都合な真実 峰宗太郎(日経BP日本経済新聞出版本部) 493</p> <p>子どもホスピスの奇跡 石井光太(新潮社) 498</p>	<p>ルポ「命の選別」 千葉紀和(文藝春秋) 498</p> <p>なぜ、在宅では「いのち」の奇跡が起きるのか? 東郷清児(東京コスモス) 498</p> <p>〈工業〉</p> <p>人類はふたたび月を目指す 春山純一(光文社) 589</p> <p>〈産業〉</p> <p>農の同時代史 岸康彦(創森社) 611</p> <p>事件現場清掃人 高江洲敦(飛鳥新社) 673</p> <p>移動貧困社会からの脱却 楠田悦子編著(時事通信出版局) 685</p> <p>生きる力 笠井信輔(KADOKAWA) 699</p> <p>〈芸術〉</p> <p>音楽の肖像 堀内誠一(小学館) 762</p> <p>アメリカから遠く離れて 瀬川昌久(河出書房新社) 778</p> <p>そして映画館はつづく フィルムアート社編(フィルムアート社) 778</p> <p>日本「米軍基地」列島 吉田啓(音羽出版) 778</p> <p>〈言語〉</p> <p>翻訳目録 阿部大樹(雷鳥社) 801</p> <p>〈文学〉</p> <p>大借金男・百間と漱石センセイ 小森陽一(新日本出版社) 910</p> <p>わたしの好きな季語 川上弘美(NHK出版) 911</p> <p>夜景座生まれ 最果タヒ(新潮社) 911</p> <p>還つて来た山頭火 立元幸治(春陽堂書店) 911</p> <p>Seven Stories 糸井重里(文藝春秋) 911</p> <p>とわの庭 小川糸(新潮社) 911</p> <p>ふつうでない時をふつうに生きる 岸本葉子(中央公論新社) 911</p> <p>ガラスの50代 酒井順子(講談社) 911</p> <p>謹訳世阿弥能楽集・上 林望(檜書店) 911</p> <p>ブラック・シヨーマンと名もなき町の殺人 東野圭吾(光文社) 911</p> <p>なくなったら困る100のしあわせ 松浦弥太郎(SBクリエイティブ) 911</p> <p>武漢日記 方方(河出書房新社) 911</p>
--	--

昨年度の 図書室利用状況



- 昨年度の開室日数は、256日
- 貸出冊数は、20,333冊
- リクエストの件数は、  
窓口での受付分が 1,153件  
Webでの受付分が 6,368件
- 図書室の蔵書数は、26,706冊  
(閉架を含む)

図書室のしごと

おべんとうの時間が  
まらいだった



講師 阿部直美 (フリーライター)

航空会社機内誌の人気連載「おべんとうの時間」。阿部さんは、夫と娘とともに取材先を巡り、たくさんの人達のおべんとうにまつわる心温まる記事を届けてきました。そんな阿部さんは子どもの頃、色味がなく、何より息苦しかった家の食卓を思い起こす自分のおべんとうが嫌いでした。物心ついた頃から家族との葛藤を抱え、いつしか「家族」こそが阿部さんのテーマとなりました。おべんとうの先に様々な暮らしを見つめてきた阿部さんに、ご自身が「家族」に対して考えてきたことを中心にお話いただきます。

〈阿部さんの本〉

表題作(岩波書店)、阿部了との共著で『おべんとうの時間』(1〜4巻、木楽舎)・『手仕事のはなし』(河出書房新社)ほか

とき 6月6日(日) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 会場受講40名(申込先着順)

オンライン受講30名(申込先着順)

申込先 5月14日(金)朝9時〜6月1日(火)夕5時

会場受講 公民館 ☎(572)5141

オンライン受講 : sec.kominakan@city.kunitachi.lg.jp

※申込メールへ記載いただく項目

【件名】講座名【本文】①氏名 ②ふりがな ③住所 ④電話番号

※参加方法の詳細は、前日までにメールいたします。

※当日、参加者側の環境による接続や音声の不備についての

問合せには、対応できませんのでご了承ください。

〈私の本棚から 第2回〉

益田ミリ著

『永遠のおでかけ』



上野千晴

「叔父さんに出すお客様用の麦茶が美味しそうに見えて、運ぶ途中、筆筒の陰でこっそり一口飲んだ。」思わずくすりと笑ってしまうエピソード。誰にでもあつ、幼い頃のちよつとした出来事だ。著者と叔父さんの今昔を序章にして、周りの人との死別と思い出、親子の間模様が綴られる。大人になったからこそその率直な視点で描かれる別れの時間。章が時系列に進んでゆくことで、その時々状況に向き合う、著者の揺れる想いの様が素直に伝わってくる。悲しみだけでなく、ちゃんと笑いがあるところも人間味があり自然だ。

普段は記憶の奥にしまわれている小さな出来事も、故人と自分を繋ぐ鍵のようにになっているのかもしれない。街の風景に、生活の中に、故人を想わせる切っ掛けが散見している。折に触れて呼び起こされた記憶は、一つの形ある思い出として息を吹き返すのだ。

作品の中では、特に食べ物に関する思い出が数多く出てくる。コンビニにおでんを買いに行く出来事とても印象的だ。大人になった娘が、父におでんを買って貰う。お金を払う父の姿と、気前の良さが好きだという。レジでのちよつとした時間に、父と娘の温かい歴史を感じる。父を見る娘の視点は、おそらく子どもの頃のままだらう。変わらぬ父の姿を誇らしく思う著者の心情が伝わってくる。決して過大に描かず、ありのままに書かれてあり、色んな親子の形はあるにせよ、ああ親子って、きつとこんなだよなと思わ

せる。自分にもおそらく訪れる、些細で大切な思い出との対峙。その時を想像して、私の鍵となる思い出とは何だろうか、感慨深くなる。

この本は、読み手の置かれた立場によって捉え方が違ふかもしれない。いずれの立場に於いても、人との別れに伴い、残される側が後悔しないことなど無いのではないかと思つた。生きている時間の正解もなければ、死んでからの弔いに正解もないのだと思う。「しておけばよかった」と考えるのも、既に取り戻せない時間だと認知しているからだ。亡くなった人とはもう、同じ時間を共に歩むことは叶わないこそ後悔。取りこぼしてしまつた自分への叱責なのだらう。身内の死に触れ、思い出を紐解きながら自分の生き方の答え合わせをするのかもしれない。たとえ正解がなくなると、自分らしく故人を想えば良いのだ。

大切な人の死を、二度と戻らない永遠のおでかけとした表現は、旅好きの著者ならではの、上手な思い出の納め方だなと感じた。

くにたちブッククラブ

—人生、野を越え山こえて—

古川日出男

『ベルカ、吠えないのか?』

(文春文庫)

講師

紅野謙介

(日本大学・日本近代文学)

とき

5月13日(木)

夜7時半〜9時半

ところ

公民館 地下ホール

申込先

公民館 ☎(572)5141

\*次回は6月24日(木)

柳美里『JR上野駅公園口』

(河出文庫)です。

